
最強主人公もどきが消えるまで

片岡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最強主人公もどきが消えるまで

【Nコード】

N5293Z

【作者名】

片岡

【あらすじ】

モバゲーで公開していたもの。あつちでは『ありがち最強主人公が消えるまで』。全然モバにありがちな最強主人公にならなかった。ので題を変えました。

加筆修正してあるのでモバのほうとは色々と違いが出ています。でもきつと初見の方が多いはずなので其処はあまり気にしないで大丈夫かな。

内容はそのままです。主人公が“最強主人公”を消す話です。色々キモいです。この作品の主成分はヤンデレです。私がリアル中二、

そして厨二病発症時に書き始めたもので、なんか色々あったな感じです。寧ろ今も発症してるのかもしれない。ご注意を。一話一話の長さは全然揃ってない。

タグの“腐った人”からはモバでつけていただいたタグです。

不快？理解不能？我々の業界では（ある意味）褒め言葉ですが何か。自分勝手に、自分のことは棚に上げて、自分が一番可愛くて、でも人間ってそんなもんだよね。……そんなお話。

初めまして、最強主人公アンチ派です（前書き）

話が進むにつれて身勝手なヤンデレたちが多数登場。

合う人には中々好評な作品ではありましたが、合わない方は本気で合わないみたいなので注意。

温いけど色々あれれな表現も。

“ あ、こりやもう駄目だ ” とか思われましたら逃げて下さい。

初めまして、最強主人公アンチ派です

魔法。それは、俺たちにとっては必要不可欠なものだ。

魔法がなければ此処までの人間の進化は有り得なかったし、そもそも生存することすら不可能だったと言われているほど。

それは誰にでも扱えるもので、これが使えない者は落ちこぼれとして見なされる。

しかし、誰にでも扱えると言っても才能というものがある。その才能を伸ばす為、魔法学園という魔法使いのための学園が作られた。

そんな俺たちの通う魔法学園に、ある入学生がやってきた。

その入学生の名前はカイト・リーブル。此処らでは有名な“落ちこぼれ” だった。

「おい、何を見ているんだ？」

「っマキ……」

不意に声をかけられ、思わずびくつく。俺の様子を見て、すまんと謝ったあと、俺の友人であるマキはまた訊ねた。

「ああ……、ああ、ちょっと、」

言葉を濁す俺を不思議に思ったのか、俺の視線の先を辿り、マキはあからさまに顔を曇らせた。

「、早く行こう」

早く此処から離れたい、とマキは俺の腕を引く。

其処から離れる前に、もう一度楽しそうに笑うあいつらを窓から見下ろし、目を伏せた。

木漏れ日があいつらを包み込んで、容顔は整っているあいつらだから、とても神秘的な一つの絵のようだった。

「……カイト・リール」

かの有名な現・闇帝の息子を親友に持ち。

「カイトは博識ですね!」

現・光帝の娘と、この学園自慢の天才少女を惚れさせて。

「わあ、カイト、凄い!」

「カイト……、凄いね。私でさえ知らなかったことを知っているなんて」

魔法が使えなかったのは実は全属性を持っていて、それらが互いに相殺しあっていたから使えなかっただけ。

今はちゃんとコントロールできるようになったからこの大陸でも五本の指の中には入る天才魔法使いになり。

SSランクの任務で手を抜けるほどの実力で。

誤解が解け今までずっと縁を切られていた家族ともよりを戻し。

ああ、ああ、良かったな。恵まれてるな。幸せだな。今までの苦労が報われたな。おめでとう。

でも知ってるか？ その幸せの裏でどれだけの人間が傷つき、悲しんだか。

「……俺は、自分のことしか考えられねえからさ」

お前も幸せになる権利はあるよ。あるんだろうな。だけど、その代わりに俺の友達が傷つくのはさ、納得できねえな。

初めまして、カイト・リーブルアンチ派です
(最強とか、天才とか、悲劇のヒーローとか)

初めまして、最強主人公アンチ派です（後書き）

SSランクとか言っちゃってるけどギルドとか出てきません。
そうです。ギルドの仕組みを私がよくわかっていないだけです。

俺の友達

俺には友人が何人かいるが、特に親しいのが二人、一学年下にいる。そのうちの一人がマキ・シグナルだ。

シグナルの名を聞いたことのない魔法使いは、まずいないと思う。

魔法界には魔法の皇帝と呼ばれるほど、魔法に優れた方たちが四人いる。

光帝、闇帝、土帝、水帝。その名の通り、それぞれの属性を得意とする魔法のエキスパートたちだ。

そしてマキは現・水帝の息子。子供ながらにかなりの实力を持った奴だけど、その実力の裏には多大な努力が隠されているということとを俺は知っている。

俺以外にもマキの努力を知っている奴がたくさんいたから、マキは僻まれることもなく、たくさんの友人を持って毎日楽しそうに笑っていた。

しかし、そんなマキが今、酷い虐めに遭っている。それは、あることが原因だった。

いつだったか、リーブルたちが闇帝の息子と光帝の娘と学園一の天才を引き連れて歩いていたんだ。迷惑なことに、廊下のド真ん中で横に目一杯広がって。

勿論、人にぶつかるな。そんなことしてたら。

そうしたら案の定、マキの友達（ちなみに俺の友達でもある）が

ぶつかって怪我をしてしまったんだ。

正義感が無駄にあるマキは猛烈に怒って、リーブルを校舎裏に呼び出した。

「お前、いったいどういうつもりだ！！ 人にぶつかっておいて、謝りもせず、それどころかあいつを怒鳴りつけるなんて！」

「は……？ なんの話だよ」

頭に疑問符を浮かべたリーブル。ああ、それが普通の反応だろうな。いきなりそんなこと言われたって、わからないと思う。

俺はこのとき、ちょうど二人して校舎裏に行くのを目撃したから心配になってついていった。ストーカー？ うるせえよ。

「ミックだ！ ミック・チゼッタ！！」

「ああ、あいつ」

リーブルは面倒臭そうな顔をした。マキは顔を怒りで真っ赤にしてリーブルをきつく睨みつけている。

少し出ていこうかとも思ったけど、俺まで加わったらリンチとかって勘違いされそうだ。出ていかないほうが良いかもしれない。

ただでさえリーブルは学園で一番人気のあった光帝の娘を惚れさせてるってんで妬まれてるから。取り巻きは結構そういうのに敏感になっている。

此処で、そんなことを気にしないで出ていけば良かったんだ。

「しかもあいつは怪我もしていたんだぞ！ あいつはちゃんと脇によつてお前たちを通そうとしていたし、明らかに非があるのはお前たちのほうだ！」

「……………」

「……人の迷惑くらい、考えたらどうだ」

溜めこんでいた文句を全部吐き出して少し冷静になってきたのか、声を抑えてマキは最後にそう言った。

すると、リーブルは舌打ちをしてため息を吐いた。

「はあ？ 意味わかんねえ」

「……………は？」

マキはポカンとした顔をした。俺も多分そんな顔をしていた。リーブルの言った言葉が、一瞬理解出来なかったんだ。あまりにも、想像してた言葉とはかけ離れ過ぎてて。

「だいたい、そいつも魔法使いのはしくれなら初歩の回復魔法くらい扱えんだろ。怪我したなら、治せば良いじゃん」

「っな、！」

「わかったなら、さっさとどっか行けよ。オレはこれから用事があるんだっての」

いや、何もわからない。多分マキもそう思ったと思う。それと同時に言い表せないほどの怒りがマキから冷静さを奪って。

「お、前ええッ!!」

だからあんなことをしてしまったのだと思う。リーブルを殴るなんて、そんな馬鹿なこと。

相手との実力差がわからない馬鹿じゃない。相手が周りからどれだけ慕われている人間かわからない馬鹿じゃない。そんな人間に危害を加えるなんてことしたらどうなるかわからない馬鹿じゃない。

だけど、そんなこと考えられないくらい、マキは怒っていたんだ。大切な友人のために。

「ッ何しやがる!!」

情けないことに今まで俺は固まっていたんだが、リーブルの声にやっと我に返って慌てて止めに入った。

そして怒りで興奮するマキをなんとか宥めて、自室に無理矢理押し込んだ。

そして次の日。マキの下駄箱はゴミで溢れ返り、誰かの横を通れば（主に女子だったと思う）魔法を仕掛けられたり、足を出され転びそうになったり。

まるで、子供のような嫌がらせ。最初は鼻で笑っていたマキも、

それがずっと続くと日に日に疲れた様子を見せていた。やつれて、顔色が悪い。

勿論、これらのことは昨日のことが原因だ。

リーブルは容顔が有り得ないくらいに整っている。そんなあいつが顔を真っ赤に腫らして帰ってきたものだから、クラス中は大騒ぎになった、らしい。

どうしたと訊いてきた奴には“マキ・シグナルに殴られた”と大声で喚き、訊いてもいない奴にも“マキ・シグナルに殴られた”と大声で喚いたという。

結果、マキは学園中の敵に。しかも、よりにもよってマキはあの気違いと同じクラスだ。本当に、可哀想に。

俺は、何も出来なかった。

可哀そうな俺の友達

（あんまり涙を見せないあいつが泣きながら言うんだ）（助けてくれって）

もう一人の俺の友達

前にも言った通り、俺には特別親しい友人が二人いる。そのもう一人の友人がミック・チゼツタだ。

実は、こいつは現・土帝の息子だ。凄過ぎる友人たちに囲まれて俺の存在が霞んでいるように思える。と、まあ、それは置いて、少し気が弱いのが玉に瑕だが、優しくとても良い奴だ。……優しすぎるのも、玉に瑕だ。

実力はあるのに、ぽやぽやにこにこしているからかミックは馬鹿にされやすい。

だけど、やっぱり穏やかな奴だから、リーブルたちに不当な扱いを受けても「ぼくは大丈夫だから」と苦笑して、俺たちを宥る役^{なだ}に回っていた。

怒っても、何も悪くないのに。

一度、どうしてそんなに笑っていられるのかと訊ねたことがある。すると、ミックは笑っていった。

「馬鹿にされるのは確かに悲しいけど、その分僕が頑張って馬鹿にされないようにすれば良いだけでしょ？」

どうしたんだろ、こいつ。どうしてこんなに良い奴に育ってるんだろ。お兄さん、思わず目頭が熱くなりました。

健気過ぎるぞお前……！

だけど、そんなミックが最近、苛々している。

「ねえ、僕、胸の此処が、凄くムカムカするんだ。……気持ち悪い」

昨日は笑顔でそんなことを吐き捨てていた。少し怖かった。

原因はマキが受けている理不尽な苛めだ。

苛めというものはまあ理不尽なものだが、その理由がマキの場合、あんまりにも理不尽すぎる。

マキはミックに怪我をさせたりリーブルに謝罪を求めにいっただけだ。だというのに、あいつが意味のわからないことを喚きだすから、こんなことになってしまった。

確かに、こっちも手を出したのは悪かった。俺たちは確かに、悪いことをした。

でも、そういうことをする原因となったのはやっぱりあいつで。

……俺の考えがマキ寄りなだけなのかもしれないが、俺にはマキが悪いとは到底思えなかった。

ミックもそう思っているからこそ、苛々している。

ミックのあの気の抜けるような可愛い笑顔が、俺たちにとっての何よりの癒しだった。

「怖いんだ、僕。こんなに真っ黒な感情を抱えて、自分が自分でなくなってしまうようで……っ」

泣いて、それでも苛立ちを抑えられなくて。

最近のミツクの眉間には深い皺。目つきは鋭く、口を固く結んで。苦しい、痛い、ム力つく。目を赤くして、表情を怒りの色に染め上げて。

怒りを露わにすることは少なかったミツク。ストレスで胃に穴が開かないことを祈ろう。

もう一人の、最近苛々してる俺の友達

（あんまり怒らなかったあいつが眉を吊り上げて言うんだ）（あの子、赦せないよねって）

もう一人の俺の友達（後書き）

ちなみにモバでありがちだった最強主人公の設定

- ・容姿は上の上（笑）お寿司。
- ・めっちゃ落ちこぼれ。魔法使えない。
- ・実はフェイク。ギルドではかなりの実力者。なんか通り名ついでる。
- ・なんで落ちこぼれのふりしてんのかは結構あやふやにされてる。実際なんでだろうね。思いつかない。
- ・美少女ばつかに好かれる。周りに美形じゃない。
- ・作中に不細工は絶対に出てこない。出てきてもなんか可哀想な役回り。
- ・ライバルが物凄く安っぽい。だいたい性格の悪いお坊ちゃんとかヒロインのことが好きで嫉妬に狂った不細工。
- ・だいたい授業はサボって何処かで寝てる。勉強しろ落ちこぼれ。
- ・なのに何故か先生から信頼されてる。可笑しいだろ。

だいたいこれくらい押さえとけばこの作品を読むのに支障はないでしょう。

使い魔は大天使

今まで馬鹿な行動を散々とってきたリーブルだったが、此处にきて、またしても馬鹿げた行動を起こしてくれやがった。

我が魔法学園では、高等部に進級して、（リーブルにとっては入学して）五ヶ月ほど経ってから使い魔を呼び出す授業が行われる。使い魔とは地獄（魔界ともいう）、もしくは天界から俺たち魔法使いが使役するもので、だいたいの魔法使いは使い魔を従えている。

ちなみに、俺はあいつらより先輩だから、それはすでに済ませている。

俺の使い魔はなんでも神獣という奴らしい。狐みたいな姿で、これがまた愛らしい。今や俺たちの第二の癒しと化している。

もふもふは正義だ！ 悪い、ちよつと宣言したくなったんだ。

ところで、優秀と言われている俺でさえこいつを召喚したときに腕を一本持っていかれたというのに、あいつは無傷で俺より格上の奴を召喚したんだという。

それは素直に凄いと思う。あいつの性格は認めちゃいないが、あいつの実力だけは認めている。

あ、腕は運良く喰われなかったので魔法でくつつけた。痛かった。泣くかと思った。寧ろ部屋で召喚したばかりの使い魔キちゃんを抱き締めながら泣いてた。

後で心配してきてくれたマキとミックにドン引きされた。

使い魔以前に神獣に渾名をつけるのってどうなのとか聞こえない。

話を戻そうか。

それで、あいつも使い魔を呼び出したんだ。リーブルが呼び出したのは大天使だ。そういえば、俺の使い魔もこいつの使い魔も“魔”じゃないな。

現・闇帝の息子は闇の精霊の長。現・光帝の娘は光の精霊の長。天才少女はドラゴン。マキは水の精霊の長。ミツクは土の精霊の長。

今年の一年は、実力を持った奴がまるで狙ったかのように集まったと思う。正直いつか抜かれてしまっくんじゃないかとひやひやしている。

それで、リーブルが起こした問題というのが、その、天使との肉体関係、だ。うん、まあ、詳しく言わなくとも察していただけたと思う。

誘ったあいつも悪いが、それに乗った天使も悪い。随分な尻軽天使だったらしい。

あいつの顔に釣られてあっさり……、こっ……。これ以上俺の口から何も言わせないでくれ。

だいたいそんなことであればよく大天使だなんて位につけたものだと思う。本当不思議だ。

勿論、神はお怒りになられた。それはもうかなり。

お陰でキーちゃんも怒られてしまったらしい。とぼっちりだ。八つ当たりなんて神様も随分人間らしいところがあるな。

天使というのは清らかな存在でなければならぬ。清らかそのものであるような存在の直属の部下なんだからな。当たり前だ。

それが精霊ならまだ……、こう……、いけたかもしれないのによりにもよって相手は人間だ。
もう誰にも庇い立ては出来ないだろう。あいつは神を敵に回したんだ。

使い魔は尻軽大天使

（ああああ主様どうか慈悲をお与え下さい！！）（考え無しお間抜け大天使様が堕ちていく）

俺の好きな人

唐突だが、俺はまだ十七だ。大人なのか子供なのか、微妙な年齢。ぶっちゃけ勉強よりも友達と遊んでるほうが好きだ。机に向かってノート開いてるよりも森や洞窟に行つて探検するほうが好きだ。何が言いたいのかというと、普段大人っぽいと言われるてもガキみたいなのところがあるわけで。

一応、恋愛とかにも興味があつて、いや、うん、はっきり言う。好きな人がいるんだ。

俺の好きな人は学園の近くにある教会に住み込みで働いてるシスターだ。名前はセーラ。

ちよつと、あれ？ っと思つたろ。

……察しの通り、シスターっていうのは神に全てを捧げた女だ。俺なんかと汚い関係を結ぶことは許されない。

まあ、報われない恋とはわかつていてもだな、それでも俺はあの人が好きなんだ。想うだけなら、良いだろう？

ええつと、それで、最近その人、顔を真っ赤にしてボーっとしたり、食欲がなくなったりと、ちよつとおかしいんだ。

嫌な予感がして、訊いてみた。もしかして、

「なあ、シスター」

教会脇にある花壇に水をやっていたシスターが、俺の声に反応して振り向いた。茶色の髪がさらりと揺れた。

「なんででしょう？」

「もしかして好きな男でも出来たか？」

俺とシスターは結構仲が良い。勿論、それは俺の影ながらの努力があつてのものだけど。

とにかく、仲が良いからよく相談を受けたりしていたんだ。だから、俺は今回もシスターの悩みを訊くという名目でこの胸の内の不安を取り除こうとした。

だけど、

「、っあ……。え、ええ……」

頬を染め、シスターはそつと俯いた。いや、もうな、このときの俺のショックは言葉じゃ言い表せない。冗談抜きで死にたかった。

シスターは至って平凡な顔立ちだけど、このときの顔は凄く可愛かった。でも、シスターにこんな顔をさせてるのは俺じゃなく、何処かにいる俺の知らない野郎。

想像してみる。惚れた女が自分以外の男のことで顔真っ赤にするんだ。死にたくなるだろう。

「へえ、そうか！　どんな奴なんだ？」

ああ、今俺は笑えてるか？　いつもの笑みでシスターの悩みを、恋の相談を聞いているか？

なあ、そいつ良い奴なんだよな。シスターが惚れた男だ。きっと俺が敵わないくらい男前で、優しくて、完璧な奴なんだろう？

そうと言ってくれ。そうすれば、きっと諦めもつく。

期待にも似た気持ちでシスターを見つめる。シスターは恥ずかしそうに目を伏せて、呟いた。

「……知っていますか？　あなたの学園に入学してこられたと思うんですけれど。……カイト・リーブルさんという方で、」

どうしてよりもよってそいつなんだと。

リーブルは確かに実力はある。俺たちでも難しい任務だつて一人で軽々とこなしてみせるというし、天才と言っても過言じゃない。

だけど、聞く限り見る限りじゃ性格は最悪だ。

だけど、シスターが惚れた男なんだから。きっと俺がまだ知らないだけで、何処か良いところがあるんだろう。そうじゃなきゃ、悔し過ぎる。

「……シスター。大丈夫なのか？　その、シスターは神に全てを捧げた身で……、」

「わかっています」

間髪入れずにシスターは答えた。真っ直ぐに俺を見つめている。不安と、そして幸せな恋の色に染まった瞳で。目が、逸らせない。

「でも、それでも好き……なんです」

ぞくりと、した。浮ついているようで、その言葉の芯はどっしりと重い。シスターは、本気なんだ。たったそれだけの言葉で理解出来た。理解出来てしまった。シスターのどんなことでもわかるように、ずっと傍で見てきたから。

「どうしたら良いと、思います？」

シスターはそう訊ねた。

ああ、やめろ。そう、耐えるんだよ。悪いのは俺だから。いつまでも行動に移さずに、友達なんかで満足してた俺が悪いんだろ。

「……告白するしかないんじゃないか？」

「告白」

「、ああ」

顔を真っ赤にしてシスターは俯いてしまった。困ったように視線を足元の辺りでうろつろさせている。

嘘。嘘嘘嘘嘘。嘘だシスター。やめてくれそんなことしないで。シスターは本当に良い女だから。だからリールがそれに気付いてしまったら、シスターがリールに取られてしまう。

でも、偽善でもなんでも、俺はやっぱりシスターに幸せになってほしくて。

「頑張れよ！俺も出来る限り協力するから」

可愛い可愛い俺の好きな人

（でもその人は俺じゃない誰かを見ていた）

女の敵

俺はその日から頑張ってシスターを応援した。泣いてたマキも苛々してたミックも俺を気遣わしげに俺を見るほど。

「ごめんな、お前らがこんなに苦しい思いしてるのに、俺は……、」

こうして言葉に出してみると、自分の自己中心的な行動と考えを直視させられて嫌な気分になる。

でも、やめるわけにはいかない。自己満足ではあるが、せめて、とマキたちに謝ると、慌てて顔を上げさせられた。グキって嫌な音がした。

「うぐつ、！」

「そ、そんなのいい！ 僕はお前たちと一緒にいれて、それだけで気が楽になるし、」

眉を下げて、マキは困ったように笑った。そう言ってくれるのは嬉しいけど、まず手を離してほしい。

俺はマキの手に自分の手を当て、さり気無く顔から退かした。ミックもおおずおおずと横から声を出す。

「大丈夫だよ。ぼくたちはそんなの、気にしてないから。あのね、でも、」

「そうか。……ありがとう」

あいつらが何を言いたいのかは気付いていた。

でも、それを言われてしまえば俺は、今度こそ諦めきれなくなる。だから遮った。俺の意図に気付いた二人はため息を吐いた。

「……僕が言えることじゃないけど、無理はするなよ」

「辛くなったら、あの、いつでも言ってね？」

俺は笑ってみせた。

俺は学園内を彷徨い、リーブルを探していた。

リーブルを連れて、教会にいるシスターに会わせてやるのが俺の役目。シスターは其処でリーブルに告白する手筈になっている。

単純？ 知ってるよ、うるせえな。でも、こういう方法のほうが却って良い気がするの俺だけか？

「あ、いた」

よくリーブルが出没する中庭を探してみると、あいつはいた。珍しくリーブルは一人で歩いていて、時折立ち止まっては何か（花か？）を見ている。取り巻きたちはどうしたのか。だが、いないほうが都合だ。いたら喧しく騒ぐに違いない。あいつらは被害妄想が過ぎる。

「えーと、……よお」

とりあえず近付いて声をかけてみる。なんだかなり気まずい。今すぐにでも逃げ出したい。胃液を吐きそうだ、っていうのはさすがにないが。

リーブルは訝しげな表情で振り向いたが、俺の顔を目に入れると、目を見開いた。な、なんだ、なんだ？

「あ、あんたッ……！」

「……覚えてたのか」

予想外だ。リーブルはあるとき マキとリーブルの殴り合いを止めたとき のことを覚えていたようだ。

あんなの会った内にも入らないだろうと思って初対面の振りして話しかけた自分を殴ってやりたい。恥ずかしい。悪い、前途多難だシスター！

「お、覚えてるに決まってる！ それで、俺になんの用なんだ？」

「少し、散歩に出ねえか？」

俺は阿呆なんじゃないだろうか。明らかに敵対関係にあると思われる人間に散歩に誘われてついていく馬鹿が何処にいるんだ。しかも其処まで親しくもない。これは出直すしかないな。

「ああ！」

あ、此処にいたわ。

やけに嬉しそうに頷くあいつ。何故だ。俺がマキに愛想を尽かして自分側についたとでも思っているのだろうか。

まあ、どうでも良いと俺はリーブルを連れて教会に向かった。

「シスター」

見慣れた背中が教会の庭にある花に水やりをしている。俺はそれに迷わず声をかけた。

細い肩がびくと跳ねて、勢い良くこっちを向いたシスター。じょうろに入っていた水が跳ねて修道服にかかった。

わたわたと慌てている。可愛い。

「も、もう……?」
「ああ」

驚いている、だがとても嬉しそうにしているシスターには悪いが、俺はこれ以上此処にいたくない。

シスターは最早、俺など眼中にないようで一心に俺の背後にいるリーブルを見つめている。

今すぐシスターの恋路を全力で邪魔したい気持ちに駆られた。そんなことしたら俺の今までの苦労と我慢が水の泡だからしないけど。

「、頑張れよ」

こっそりシスターの肩を優しく叩き、声をかけて背を向ける。シスターは俺を見て、力強く頷いた。

そのまま去っていくとする俺に、リーブルが不思議そうに話しかけた。

「……? おい、何処に行くんだ?」
「忘れ物したんだ。少し、此処で待っていてくれねえか?」

散歩に行くのに何を忘れて困ると言うのか。

怪しく思われてしまっただろうかと恐る恐る様子を窺ってみると、なんの疑いも持っていないようだ。早く戻ってこいよ、とかほざいている。

……秀才だとか言われてるけど、こいつ実は馬鹿なんじゃないか

……？

とりあえず、適当に返事を返しておいた。そしてちょうど良い木陰に隠れる。

程好く近く、しかもあちらからは死角になっているのでよほどのことがない限り見つかることはないだろう。

「あ、あの」

退屈そうに佇むリーブルに声をかけるシスター。頬は可愛らしく紅潮している。拳を白くなるほど握り締めていて、傍目から見えずぐにわかるほど緊張しているようだ。

「……なんだよ」

面倒臭そうにリーブルは返事を返した。此处で無視とかしていたら俺は間違いない飛び出してリーブルに渾身の力を籠めたアッパーを決めていただろう。多分避けられるけど。

シスターは少し傷ついた素振りを見せるが、健気に笑顔を作った。

「カイト・リーブル……さん、ですよ。私は、」

「は？　なんでお前オレの名前知ってんだよ。気持ち悪い」

えっ？

思わず声に出してしまって口を塞ぐ。大丈夫、気付かれていない

はず。それよりも意味がわからない。どういうことだ。何が起った。

あいつは今、なんて言った？

「え……。あ、あの、私、貴方のことが好きでっ……！」

「だからストーカーか？　気持ち悪い女だな。二度とオレに近付くな」

嫌悪の籠った、瞳。

シスターは顔を真つ青にさせた。俺は愕然とした。

「なん、で……！」

なんで、なんで、なんで！！

どうして自分の名を知っているか？　そりやお前が此処らでは有名な落ちこぼれだったからだ。

此処らでお前の名前を知らない奴はただの世間知らずの坊ちゃん
と御令嬢ぐらいだ。それくらい、少し考えればわかるだろう？

ストーカーだと？　ふざけるな。シスターがそんなことするわけ
ないだろうが羨ましい！　シスターにそんな性癖があるなら俺がス
トーカーされたい！

……じゃなくて、シスターはそんなことはしない。うん。

顔を覆って教会の中に走っていつてしまったシスター。リーブル
は面倒臭そうにそれを見るだけ。

今にもリーブルに殴りかかってしまいたいと震える拳を抑えつけ、

俺はその場に戻った。

リーブルは俺が来たとみると顔を輝かせて此方に手を振った。
シスターにあんな酷いことをしておいて、どうしてそんなに無邪気に笑えるのか、俺にはわからなかった。

「随分遅かったけど、何してたんだ？」

「……急用が出来たから、帰ってくれるか」

笑顔で訊ねるリーブルに答えは返さず、俺は冷たく言い捨てた。
大きく見開いたその中心に、俺が映っている。俺はこんなに冷たい顔が出来たのか。少し、驚いた。

「は？　ちょ、ちょっと……」

「帰れ」

もう一度言った。

まだ納得のいってなさそうな顔をしていたが、俺は無理矢理リーブルを帰した。

何度か振り向いて此方を窺っていたリーブルだったが、そのうち寂しそうな顔をして消えていった。多分、移転魔法を使ったんだと思う。

それを見送ってからすぐさま教会の中に入る。入った瞬間、シスターに泣きつかれた。

小さく嗚咽をもらすその身体を抱き止め、慰めにもならないだろうがシスターの背を優しく叩いた。

……ああ、本当に最悪だ。何がつて、全部が。

俺の敵

（お前、最低だよ）

花を枯らしたのは誰だ

……ああ、シスターのことは今思い出しても気分が悪い。今にも泣き出しそうなシスターの顔が頭に鮮明に浮かび上がって、思わず顔を歪めた。

そんな顔を、見たかったわけではなかった。

あいつの隣で幸せそうに笑う顔を見たかったのかと問われれば、そうも言えないが。

だけど、シスターの悲しそうな見たかったのかと問われれば、それははっきりと断言出来る。違う、と。

ふと思った。リーブルは周りの人間に悪影響を与えているようだが、どうしてそんな奴があそこまで好かれるのか。

シスターに限って言えば羨まし、いや、違う。ああ、もう正直に言おう。滅茶苦茶羨ましい。

じゃなくて。周りの人間を苦しめ、歪ませているくせに、どうしてあいつは……。

歪ませている、と言えばあいつの取り巻きたちもそうだ。

前は中々可愛い後輩たちだと思っていたが、今はそうでもない。暫く見ないうちに随分性格ブスになっていたみたいだからな。

先日、こんな場面を見た。

「ねえ、あなた。調子に乗らないでよ」

聞こえてきた声に、物陰に隠れた。条件反射だろうか。不審者のような嫌な条件反射が身についてしまったものだ。

此処は廊下で、それなりに人通りはある。擦れ違う同級生、後輩、先輩方が皆俺から目を逸らして通り過ぎていく。待って、待ってくれ。これは誤解なんだ。

「な、何がですか？」

見知らぬ女生徒の怯えたような声。対するはリーブルの取り巻きの一人であるリン・フリータ。現・光帝の娘だ。こんなところで後輩らしき生徒をいびろうとは中々大胆な奴だな。

しかし、誰も助けない。皆、見て見ぬふりをしている。

当たり前だ。こんな面倒臭そうなことに関わったら自分にまで火の粉が飛ぶ。気付かないふりをするのが賢明な判断だ。

「でも、なあ……」

泣きそうな顔をしている。此処で助けに入っても俺は学年が一つ上だから、さすがにマキのようにはされない（出来ない）だろう。

「よし、」

フィリータたちの前に出ていこうとすると、思いきり腕を掴まれ、影に引つ張り込まれた。ちょ……、なんだなんだ！？

驚いて首だけで後ろを確認すると、其処にはミックがいた。何かあったのか、泣きそうな顔をして俺の腕を握り締めている。待て、俺の腕を潰す気が。

やめ、あ、本当離してくれ。頼む、頼むから。痛い、痛い痛い。た、助けてくれ！ 必死に念じているとそれが通じたのかやつと腕を離される。

「み、ミック、どうした？ あの子、助けてやらねえと……、」

「駄目。駄目だよ、行かないで」

君までマキのようになってしまったら、ぼくはもう耐えきれない。そう言つて、ミックははらはらと涙を零した。

「、放っておくことは出来ない。先生を、呼んでこよう」

「……うん」

先生を呼びに行く道中、ミックは目を伏せて「ごめんね」と呟くように言つた。俺かあの子か、どっちに向けた謝罪かはわからなかったが、頭を撫でておいた。

結局あの後、先生のおかげであの騒動は収まって、あの子も暴言を吐かれた以外には特に何もされていないようだった。

良かった。怪我とかしてたらどうしようかと思ってたんだ。あいつら、なんか過激になったから。

話は変わるが、実はこの学園は初等部、中等部、高等部といったふうに校舎ごとにわけられている。

そして初等部から中等部へ、といったふうに進学する際には一々入学式が行われる。ぶっちゃけ面倒だ。

それで、フィリータは初等部入学当初は“光の華”なんて呼ばれていた。

顔良し、頭良し、性格良しと来ればフィリータが持て囃されるのにそう時間はいらなかった。それに、フィリータは光帝の娘だったから、そういうのもあったのかもしれない。

可愛いからっていつのまにかファンクラブなんてものも出来てたり……。

俺はシスターのほうが可愛いと思う。料理の味付けで砂糖と重曹を間違えてしまう辺りとか。料理は愛の力で完食した。

……話に戻ろう。ええっと、それで俺も結構前にフィリータと話したことがあったんだが、結構良い奴だったんだ。

中等部に入って暫くしてから一学年上と交流活動を行うのがこの学園の恒例行事なんだよ。それでフィリータに会ったんだ。

うん、本当に良い奴だった。物分かりが良くて、優しくて、みんなのまとめ役みたいなのがあったな。

だけど、リーブルが入学してから早一カ月。すぐにフィリータは華だのなんだの言われなくなった。理由は言わなくなっただけでわかるだろう。

「可哀想に、な」

ろくに面倒も見ないで、たまに気が向けば泥水ばかりやるからこくなるんだ。光帝様は物凄く後悔しておられた。

……それも後の祭りってやつなんだけどな。

華を枯らしたのはお前だ

（貴女たちみたいな不細工、カイトには釣り合わないわ）（綺麗な華には、それ相応の綺麗な水をあげましょう）

辛い恋（前書き）

ちょっと書きたいことが上手くまとまらなくてぐだぐだ。

辛い恋

リーブルの取り巻きの一人に、ミーナ・ソレイトという女子生徒がいる。

そいつもリーブルと同じクラスで、取り巻きの中ではフィリタのようにかなりの地位（？）にあるそうだ。

学園一の天才の呼び名に恥じぬ頭脳を持ち、實力もかなりの腕前だ。

そして、俺の友人、マキの幼馴染でもある。

マキが言うにはあいつの周りには昔からあいつ自身じゃなくて、あいつの頭を見る奴が多かったそうだ。天才という粹でしか、自分を見てもらえなかったんだろうな。

だが、マキは違った。マキは、まあ……、ソレイトのことが好きだったらしく、いつでもあいつの味方であるように心がけたそうだ。

しかし、その努力も空しく、ソレイトは自分自身を見てくれる人間はいないのだと思い込み、周りを拒絶するようになってしまった。そうしてそのまま何年かが過ぎ、リーブルがこの学園にやってきた。リーブルはソレイトの拒絶をもともせず対等に話しかけてくれ、それが嬉しくて心奪われた、らしい。

……なんとなく、釈然としない。

そもそも、本当にソレイトは拒絶をしていたんだろうか。

本当は、マキに甘えていて、いつだって救いを求めている、だからリーブルを簡単に受け入れてしまったんじゃないだろうか。

だから今、苦しんでいる。

最近、リーブルとフィリータはちょっと良い感じらしい。何がって……、そりゃ、あれだろう。男女間の……、えっと。

まあそういうのがあってソレイトは最近目に見えて落ち込んでい
るらしい。

ソレイトとフィリータは所謂恋敵みたいな存在だったらしいし、
そりゃ落ち込むよな。

そして、今。

俺の視線の先にはマキとソレイトがいる。

マキがソレイトを呼び出しているのを、偶然見かけ、俺は後をつ
けた。ああいうこともあったし、少し心配だったからな。スト・カ
ーじゃない。

一方はやけに暗い顔をしていて、一方はやけに緊張した顔つきだ。
これからいったい何が始まるのだろうか。

「……みつ、みみみ、みんな、ミーナ」

蝉かよお前。緊張しすぎだよ。なんだ“みんな”って。自分で
も馬鹿みたいなことを言ったという自覚はあるのか、マキはちょっ
とだけ顔を赤くした。

対してソレイトは酷く冷めたような対応だ。

「今更、私になんの用だい、マキ」

瞳は、暗い。それを見てしまったのだろうか、マキは泣きそうにぎゅう、と眉間に皺を寄せていた。何かを言いたそうに口を開いては閉じてを繰り返す。

言いたいことはあるけれど、それを上手くまとめられないんだらう。

「お、お前は、」

ようやく自分の中で言葉の整理が出来たのか、やっと口を開けた。

「昔から天才だのなんだの言われているが、えっと、や……やつぱり馬鹿だな……！」

ああ、考え抜いた末がそれなんだ。

もっと、もっとなんか……、他に何かなかったんだろうか。

余談だがあいつは“裏でツンデレ貴族”なんて呼ばれている。

ちよっとマキを馬鹿にしすぎた渾名じゃなかるうか。俺も初めて聞いたときは笑ったけど。ミツク？ ミツクは大笑いしてた。

マキの言葉が余程癢に障ったのかソレイトは顔を真っ赤にしてマキを睨んだ。

そりゃいきなり馬鹿だなんて言われたら誰だってムカつくだろうな。

「な、なんだって！？　そういう君は昔からビービー泣いてばかり！
その女々しさは相変わらずのようだね！」

子供の喧嘩か。

なんだこれ。ツンデレ対ツンデレか。サブタイトルは『素直になれない二人』か。

俺の個人的な見解になるけど、マキからのソレイトの小さい頃の話を書く限り、ソレイトは多分マキのことが好きだったんだと思う。マキは言うまでもなくソレイトのことが好きなんだろうし。両想いだ、両想い。

多分、今上手い言葉で口説ければソレイトは余裕で落とせると思う。頑張れマキ。

「馬鹿に馬鹿と言って何が悪い！」

「誰が馬鹿だ！　私は少なくとも君よりは優れた頭脳を持っているさ！」

「どうだかな！」

……なんか普通に喧嘩になりかけてる気がする。止めてきたほうが良いのか、これ。

あれ、可笑しいな。こんなふうになるはずじゃなかった。

「っだいたい、お前は昔からそうだった！」

「何がっ……!!」

「お前の傍にはいつも僕がいただろう！ お前は余所見なんかしないで僕だけを見ていれば良かったんだ!!」

「ッ!!」

ぼんつと一気に頬を染め上げるソレイト。俺はその言葉の急転換の仕方にぼかんとしてる。

……い、意外と言うなマキ。

幸せな愛

（恋とは落ちるものです）（愛とは積み重なるものです）

類は友を呼ぶ

リーブルの取り巻きには男子生徒もいる。……いや、勿論そいつにリーブルへの恋愛感情はないと思う。

それで、その男子生徒、リーダー・ザーシャは俺の入っている委員会の後輩で、結構仲が良いほうなんだ。

あ、ザーシャは闇帝の息子で、フリータの幼馴染らしい。そういえば、今年は四帝の子供たちが勢ぞろいしているんだな。かなり豪華だ。

ちなみに委員会は色々あって、ボランティア委員会なんていう校内、校外の美化活動に専念するようなものもあれば、魔法研究委員会なんて魔法のことについて色々研究する魔法のことに突っ込んだ委員会もある。

ボランティア委員会は断トツで人気がなく、魔法研究委員会は断トツで人気がある。俺たちが入っているのは後者の魔法研究委員会だ。

話を戻すが、最近リーブルが転入してきたことで、学園内の空気が不穏な感じになってきている。まだ表立って何かを仕出かそうなんて奴はいないが、それも時間の問題だと思う。

こんな学園だから、力を持った奴なんて山ほどいる。

いくらリーブルやザーシャといった実力のある奴がいたとしても、学年が上の奴らに束になってかかられたらひとたまりもないだろう。戦闘でものを言うのは何も実力だけじゃない。知識や経験も必要になってくるんだ。

マキたちなんかには劣るが、ザーシャだって俺の可愛い後輩なんだ。このまま同級生や先輩方に滅多打ちにされるのを傍観しているだけっていうのは忍びない。

だから、俺はザーシャに忠告をしに行った。さすがに先輩方を止めに行く勇氣はないしな。

「……今、なんて言いました？」

「だから、リーブルとつるむのはやめておけ。後できっと大変なことになるぞ」

リーブルの力は良い意味でも悪い意味でも強大過ぎる。出る杭は打たれるって言うだろう。ただの嫉妬でリーブルを嫌う奴はかなりいる。

しかし、中にはリーブルのその強大過ぎる力を厭う奴もいる。

誰だって老いて死んでいくんだ。人間である限り、そのサイクルからは脱け出せない。とすると、どうだ。

果たして、老いたリーブルは己の強大な力を抑え続けることが出来るのか？

「失望、しました」

「……は？」

その疑問の答えはわからないし、そもそも全てが想像上のものではないが、そうなる可能性は零ではない。

リーブル自身に責はないだけに少し可哀想だが、一人の命と未来ある数多の命、どちらをとるかと言われれば答えなど決まっている。

目をかけてやっている後輩が色々な巻き添えに遭うのは少し嫌だ。そんな気持ちで忠告した。

しかし、失望……？ 先輩なら後輩を守るべきだろうとか、そういう意味での失望だろうか。それなら本当にその通りだから俺には何も言えない。

「あなたまでそんなことを言うなんて、どうせ先輩もカイトの実力に嫉妬して、カイトを失脚させようとかそんな考えを持っているんでしょう？」

あれっ。

いや、違う。お前は何を誤解しているんだ。

「僕はカイトの親友です。誰がなんと言おうとも、僕はカイトの親友をやめるつもりはありませんよ」

「……そうか」

「はい、それでは」

同級生たちや先輩方の目を掻い潜ってあいつを助けてやれるわけがない。

救いは差し伸べた。それを跳ね除けられちゃ、仕方ないよな。

馬鹿は阿呆を呼ぶ

（カイトが僕の親友であることが僕の誇りです）（誇りが時に自分を傷つける刃となるのは御存知？）

類は友を呼ぶ（後書き）

委員会はノリで登場。どうしようかな。

ボランティア、魔法研究、えーと、なんだろう……。風紀委員？あ
と、えー……。図書委員、……。うん、あと何かあるんだよ、きつと。

賢い王には誰もがついてくる

アリータ姫という、美姫と名高い姫君を知っているだろうか。我が国と同盟を組んでいる隣国の姫のことだ。

その美しさは吟遊詩人が寄って集って歌を捧げたがるほどで、花のように美しく、太陽の光のように暖かな心を持った、などという謳い文句が最もポピュラーだろうか。

最近、そのアリータ姫が殺害されたということで、此処ら一帯の国は大いに揺れている。

その事件の全貌を知る人間は、いったいどれほどいるのだろうか。まあ、聞くに堪えない醜聞だ。手回しされて知らない人間のほうが多いだろう。

俺は全貌を知る人間のほうに入るんだが。

アリータ姫には、実は幼少の頃より将来を誓い合った婚約者がいた。その婚約者は我が国の王子、キース王子だ。

これまた酷く端正な顔立ちで、アリータ姫とは本当にお似合いだった。

此方も吟遊詩人に歌を捧げられるほどで、獅子のように雄々しく、太陽の光のように暖かな心を持った、という歌を聞いたことがある。自分のことではないようで気味が悪いからやめてほしいと本人は言っていたが。

それで話に戻るが、あの事件は実はリーブルのせいなんだ。リー

ブル自身が手を下したわけではなく、間接的にその原因になってしまったというか……。

事件のきっかけはアリータ姫の父親、つまり王からの依頼だ。

なんでも、アリータ姫は悪質なストーカーに遭っていたらしい。仮にも一国の姫に対してストーカー行為をするだなんて相手も肝が据わっていると思う。

まあ、それで王は娘可愛さにリーブルに娘の護衛を依頼したのだという。

リーブルはギルドでは中々名の知れ渡った人間らしい。なんだっ
たか、確か“蒼穹あおぞらの戦士”だとかってという呼び名がついているんだ
とか。晴れ男かよ。

それであいつはSSランクの任務で手を抜けるほどの実力らしい
から、名が広まるのは当然と言えば当然だ。だから、実力があるつ
て有名な奴に、王は依頼したんだ。

ああ、そうだな。愚かだな。

いくら実力を持っていたとしても、所詮は子供だ。“そういう”
プロに任せたほうがずっと安心だった。

リーブルとプロの違いはなんだと思う。

……経験の、差だ。

数々の死線を潜り抜けてきたプロたちはわかっている。油断をす
ることがどれだけ危険か。自分の力を過信することが、どれだけ危
険か。

上には上がいるなんてよく言うだろう。プロたちはそんな経験を
してきたからわかっているんだ。

だが、リーブルは違った。そんな経験が無かった。なまじ実力が

あるだけに、油断が許されない状況に陥ったことがなかったんだ。だから、みすみすアリータ姫を殺されてしまったんだろう。しかし、実力を見ればストーカーとリーブルではリーブルのほうが力は上だった。だからストーカーは身代わりを使った。

そうしてあいつはまんまとそれに引つ掛かり、なんとその身代わりにさせられた奴を殺してしまった。身代わりとなった人間はストーカーとは一切関係はなく、本当に巻き込まれただけのただの一般人だ。

それで王たちは結局それに気付くことなく、リーブルに感謝して多額の報酬を握らせた。

が、次の日だ。国中の予想を裏切ってアリータ姫は殺害された。犯人は、勿論そのストーカーだ。

ちなみにこのことをリーブルは知らない。知っていたらこんなふうのうとしていられないだろうな。

唐突だが、キース王子と俺は友人関係にある。アリータ姫が殺害されたと聞き、会いに行ったが、酷かった。

目の下にはあの日から眠っていないのか、濃い隈がすっかりと刻まれていて、目は据わっていた。瞳に宿っていたのは明確な殺意。

なんでも、近頃隣国に戦争を仕掛けるつもりらしい。とは言っても隣国には王以外罪はないのだからその他の兵や町民たちを傷つけるつもりはないようだ。

しかし、これは俺の予想だが、多分戦争だなんて大事にしないと王を差し出してもらえらと思う。

あの王は無能王と呼ばれていて中々有名だった。だけど今まで攻め込まれなかったのはきつとキースたちのような強い同盟国のおかげ

げなんだろう。

ああ、ところで、最近その無能王が具合が悪そうなんだと。何か病にでも罹ってしまったのだろうか。

それとも、アリータ姫たちに呪われていたり……、なんて、そんなことあるわけないか。

愚かな王には誰もついてこない

（貴方など、死んでしまえば良い）（私と、一緒に）（私の未来を奪った貴方に、幸せなんてあげない）

賢い王には誰もがついてくる（後書き）

ザ・責任転嫁。

でも仕方ないよね。いきなり大好きな人を奪われたら、そのとき一番近くにおいて大好きな人を守れたかもしれない人を憎むしかないよね。

俺の恋した人

此処で重大な発表がある。実は俺とシスター、セーラは俺が卒業したら結婚することになりました。

なんてちよつとふざけて言ってみるとマキとミックはぽかんと口を開けていた。

何度か二人の目の前で手を振ってみると、ようやく正気に戻ったようで掴みかかれた。

え、可笑しいだろ。なんで喧嘩腰なんだよ。友達のためでたい出来事じゃねえか。祝福してくれよ。

「ど、どういうことだ！ 僕はそんなこと聞いていないぞ！」

「い……言ってないから」

「どういうこと！？ あの後思い詰めたシスターは世を偽んでしまったのではないの!？」

「お前の頭がどういうことなんだよ」

勝手にシスターを殺すな。

俺は二人掛かりでかくかくと肩と首を揺さぶられながらシスターの告白の後にあった出来事を話し始めた。

泣きじゃくるシスターを抱き締め、俺は黙り込んでいた。
ひくひくと震える肩を支え、優しく優しく背を撫でる。

「っ……ふ、……う……っ！」

唇を噛み締めて声を漏らさないように、静かに静かにシスターは涙を流していた。

嗚咽を抑えるそんなシスターの些細な行動さえも愛おしくて堪らない。末期だな。

「シス、ター……」

渴いた唇を舌で湿らせて、俺はシスターを呼ぶ。馬鹿みたいに震えて、馬鹿みたいに掠れた声だったから届いたかどうかは定かでは無かったけれど。

俺が今からシスターに言おうとしていることは、とても最低なことだ。

でも、それでも今、リーブルにふられたシスターは俺を見てくれるかもって、最低でも良いから見てもほしくて。

「好き……だ」

もつと伝えたいことはあった。だけどいざとなるとそんな言葉しか出てこなくて、俺はただその言葉だけを告げた。

好きだ、シスター。好きで好きで、堪らないんだよ。

マリア像を見つめているときの綺麗な目が好きだ。祈りを捧げているときの優しい顔が好きだ。いつも俺を気遣ってくれるその優しい心が好きだ。

いつだって俺を真っ直ぐ見てくれたお前が、好きだよ。

「、どう……して……」

小さな声が聞こえて、顔を見ないように俺の胸板に優しく押し付けていた小さな頭を離す。目が合って、そして初めて気が付いた。シスターが泣いていることに。

「えああ！？ えっ！？」

な、なんだ！　なんで泣いてんだ！？　俺が悪いのか！

そっ……そうか！　さっき噛んだのが悪かったか！？　それとも

“好きだ”なんてありきたりな言葉が駄目だったか！！

それとも、

「それ、とも……、」

俺が嫌いなのか……？

迷惑だったのか。確かに友達程度には好かれていたとは確信していた。

だけど、いきなりこんなことを言っただけは迷惑だろうし、こんなにきに弱みに付け込むようなことを言われたんだ。

友愛の“好き”が“嫌い”に変わることで、容易いだろう。

「し、シスター……？ やっぱ、嫌か？ そ、そうだよな！ 悪い！ 忘れて……」

「ちっ……違うんです！ ただ、ただ嬉しくて、ッ……！」

嬉しい、嬉しいと言いながらぼろぼろと涙を流すシスター。その涙がとんでもなく綺麗で、思わず息を止めてしまった。

え……、それよりも、嬉しい……？

「私ッ……、あなたが好きです……！」

「シスター……？ なに……、なんで……、」

訳がわからない。いったいどういうことなのか。

シスターはリーブルのことが好きだったんじゃないのか。

あ、これ、どつきりか。ああ、そうか。どつきりだ。

現実逃避を始めた俺を無理矢理引き戻すように、シスターが俺の腕をぎゅっつと握って言った。

「だって……！ 言ったじゃないですか。あなたは言ったじゃない

ですかッ……！」

「いや……、何をだ？」

「“好きな奴がいる”って！」

もしかして、と一つの出来事が一瞬にして俺の脳裏に蘇った。

まるで昨日のことのように鮮明に思い出される。だってあのときから一週間くらいやけにシスターの態度がよそよしくなったから、物凄く覚えてる。

俺が何かしてしまったのかと泣きそうになったから。寧ろシスターと会うとき常に涙目だったから。

そんな俺に同情してくれたのか暫くしたら態度はもとに戻ったけど、やけに壁を感じたな。

「だから私、諦めようって……、っ」

……やっぱり、あれしかないよなあ……。あれが、原因なんだろうか。

「あの、少し訊きたいことがあって……。良いですか？」

ある日、いつものように俺が教会にいるシスターに会いにいくと、シスターは少し訊き辛そうに俺にそう訊ねた。

特に断る理由も見つからなかったので勿論、と頷く。

「……あなたには、その、添い遂げたいと思う方はいらっしやいますか？」

「ああ、いるけど……」

そりやもう目の前に。此処におわしますが。

が、本人を前にしてそんなことを言えるわけがない。曖昧に濁して俺は首肯した。

ぴしりと固まるシスターの表情。え、なんだ。

「そうですか！　そうですよね！　ごめんなさい、変なことを訊いて……」

「い、いや、別に良いけど」

俺も人のことは言えないんじゃないだろうか。馬鹿だ。鈍感だ。

でもそれはシスターもだよな。シスターも馬鹿だ。

俺はあるときもシスターに思いつきりわかりやすいようにアタックしてたはずなんだけど。

マキとミックに惚気てんじゃねえよと殴られた。訊いてきたのはお前らのほうだろうが、理不尽じゃねえか。

俺の愛する人

（……じゃあ、俺と結婚を前提に付き合ってください）（はい！ シスターをやめてもあなたについて行きます！）（シスターってやめれるのか？）

俺の恋した人（後書き）

シスターと違って普通やめられないと思う。やめれるの？なんなの？

勤勉な愚者

昼休みにはいつも、俺とマキとミツクの三人で昼食をとるようにしている。

今日も一緒に弁当を広げていたところ、二人が話を切り出した。

「……………勉強を見てほしい」？」

マキは首肯した。

そりゃなんでもた。確かお前ら、成績良くなかったか？

マキをじいつと見つめていると、マキは「ああ、違う違う」と手を横に振って否定した。

「僕たちが見てほしいわけじゃないぞ。もしそうだとしてみてももらうならミーナに見てもらうからな」

「惚気か」

「のっ……………！！　ちっ、違う！」

「馬鹿！」　だなんて言つてマキは俺を容赦なくぶん殴った。痛い。まあ、痛くとも元気なようで安心した。

最近はソレイトと一緒に行動したりしていて、マキを虐めてた奴らも手を出せないようだし。痛いけど。

マキたちに勉強を教えるわけじゃないなら、いったい誰に勉強を教えるのだとマキたちを見ると、ミツクが口を開いた。

「あの、ぼくたちのクラスにね、えーつと……、」

「御世辞にも頭が良いとは決して言えない馬鹿がいるんだ」

「そ、そんなハッキリ言ったら失礼だよ……？」

酷い言い様だな。マキたちのクラスにそんな奴がいたのか。

記憶も探るもこの学園は生徒数が多いし、学年の違う奴なんてよっぽど有名じゃなきゃ覚えてなんてられない。

なんて名前だ？ 訊ねるとミツクがおずおずと言った。

「デューク・ディベントっていうんだけど……、知ってる？」

「ああ！ あのいつもテストで酷い点数出してる奴か」

「う……うん」

ほんと手を叩き、確認すると頷かれた。

そうだ、そうだ。確かにそんな奴がいた。それで担任の教師がいったいどうすればいいんだって泣きついてきたことがあったな。俺が知るか。

「とりあえず、今日の放課後は空いているか？」

俺を窺うマキ。おい、良いのか。ミックにかにさんウィナー盗られてるぞ。お前、あれが大好きでいつも一番最後に取っておいてるんじゃないのか。

「ああ、今のところは。まあ、何か頼まれたりしても断っておく」
「ありがとう。そうしてもらえると助かる」

自分の弁当箱に目を戻したマキはすぐさまミックに殴りかかった。数を数えてたのかお前。

今、俺がいるのは図書室だ。気になる本があったので適当に何冊か机に積み上げて読書タイム。
隣にはディベントがいて、わからないところがあったら言えと言っておいた。
横目で窺うと動きが鈍くなって、ついには止まってしまったのでそろそろ何か言ってくると思う。
言えないようだったら何かの拍子に気付いたふりをして教えてやるう。

「あつ、ああああああのつ、せっせっせ先輩っ！」
「ん、どうした？ 何かわからないことでもあったか」
「はっ……はい！ わかりません！」

そんな堂々と言うことじゃないだろう。もう少し申し訳無さそうに……、いや、別に良いんだけどさ。

俺はディベントのノートを覗き込んだ。……ああ、この問題はひっかけの問題だ。俺も一年の頃にひっかかったことがあるから、よく覚えている。

「えー、此処はだな……、」

ノートに適当に図を描き入れてやりながら説明をすると、ディベントは驚くほど真剣な眼差しで俺の手元を見つめていた。

あんまりにも馬鹿だっけ言うから、どうしようもない奴が来るのかと思っていたら、凄く真面目な奴が来たもんで驚いたよ。

「っあ……、な、なるほど！ わかりました！」

「そうか、そりゃ良かった。問題が終わったら、また話しかけてくれ」

「はいっ！」

俺は横目でディベントを見て、今度は窓から外を見た。

橙色の夕日が差し込んで、少し眩しい。この位置は中庭がよく見える。

（ああ、やっぱりいたか）

其処にはリーブルがいた。大木の木陰の下の芝生の上に寝そべって、それはそれは気持ち良さそうに寝ている。

あいつ、授業にはちゃんと出ているんだろうか。授業中もこうして昼寝をしているあいつを見たことがある。どんだけ睡眠量多いんだよあいつ。夜眠れんの？

………そういえば、リーブルのクラスの担任がリーブルのサボり癖に困り果てていたな。

「あ……、と、解けた……。こつ、これで良いんですか!？」

そんな声が聞こえてきて、俺はイベントの頑張り過ぎてグシャグシャの真っ黒になってしまったノートを覗き込んだ。

このノートの汚さはイベントの努力の証だ。うん、きっとそのはず。

「お、正解だ。お前、やれば出来るじゃないか」

「っえ……、ほっ、ホントですか!？」

実はイベントは少し理解が遅いだけで、ちゃんと教えてやればかなり物分かりは良いほうだと思う。

リーブルは今はイベントを見下しているようだが、いつかそのイベントに追い抜かれてしまうんじゃないだろうか。

怠慢な賢者

(愚者は賢者に) (賢者は愚者に) (立場の逆転)

勤勉な愚者（後書き）

私は昼寝したら夜は眠れなくなるタイプ。

民を護る正義の味方

「……あ、まずい」

「ええっ!？」

何故かシスター、……あ、いや、セーラが絶望に打ちひしがれたような表情で俺を凝視している。

ちなみに俺は今、教会でセーラが作ってくれたクッキーを食べている最中だ。あつ。

「あ、えっ!？ あつ! いや、せ、セーラが作ってくれたクッキーが不味いとかそういうんじゃない!」

「そんなわけじゃないですか! 今日だって私はバターと間違えて牛脂を入れて作ってしまったんですよ!？」

「あれ!？ 自覚あり!？」

しかも“今日だって”っていうことは毎回毎回入れる材料を間違えているということに気が付きながら俺にそれを出していたということだろうか。

あれ……、俺って実は嫌われてたり……？

「だ、だって……、どんなに失敗しても不味いなんて言わないで食

べてくれるから嬉しくって……」

ああもう可愛い……!!

今すぐ抱き締めに行きたいのをぐつと堪えた。いきなりそんなことしたら驚いてまた気絶してしまうだろうし。

「それで、“まずい”のが私のクッキーじゃないなら、何がまずいんですか？」

「あ、ああ、いや……、明日の授業で森に探索に行くんだけど、」

「はい」

「痺れをとる薬がなくて」

「ああ……」

森ってというのは結構様々な状態異常を引き起こす毒を持っている魔物が多い。

だからこういった状態異常治しの薬はちゃんと準備していかないと痛い目を見る。中等部の頃はあれだな、ちよつと調子に乗ってたから。

「じゃあ、早く買いに行かなければなりませんね」

「ああ。悪いけど、今日はこれで」

「はい、また今度」

少し寂しそうに笑って手を振るセーラに後ろ髪をひかれる思いで俺は教会を出た。

途中、目が合った神父さんに舌打ちされた。あの人、セーラのこととは自分の娘みたく思ってるから。それでも舌打ちってないと思う。

少し日が傾きかけているが、町は未だ賑やかで人々の笑顔で溢れ返っている。

うん、平和だ。

少しほっこりとした気分になったところで行きつけの薬屋に行こうと足を向けると、その薬屋の前にリーブルたちがいるのに気が付いた。マジかよ……。

いや、別にいたって良いけど、俺自身は対してあいつらに悪感情を持っていてるわけではないんだけど、マキたちのことがあるから顔を会わせ辛い。

ザーシャに至ってはもう論外だろう。最近はいいつ俺のことを視界に入れただけでメンチきってくる。怖いよあいつ。

……そういえば、ソレイトはいないんだな。マキと一緒にいるんだろうか。最近はずーブルと一緒に行動しているところを見ないし。

それにしても参ったな。薬屋なんて他にも山ほどあるんだが、彼処が一番質が良いんだ。

……気まずいってだけで俺が妥協して、それで森で大怪我なんてことになったら馬鹿だよな。仕方ない、腹を決めよう。

それに、あいつらさっきから何か言い争いをしているみたいだし、多分こっそり行けば気付かれないだろう。

「よし……」

ッ!？」

瞬間、身体を貫かれるような感覚が俺を襲った。なん、だこれ……！ 殺気か!？」

横を見ると幼い子供が胸を苦しげに押さえて倒れ込むのが見えた。重い足を引き摺るようにして、必死に子供の傍まで行く。

「おい、おいっ！ しっかりしろ!!」

拙い、殺気に耐え切れずに意識が混濁している。目の焦点は定まっていない。幼い身体にこれだけの殺気は毒だ。移転魔法を唱えようにも集中が出来ない。

「喧嘩ごときでっ……、街中で殺気を出すなよ……!!」

何も出来ない苛立ちを抑えるためにあいつらに悪態を吐く。しかし、そう言っている間にも周りの人々は次々と倒れていく。当たり前だ。少しは耐性のある俺でさえこうなんだ。一般人が、耐えられるわけがない。

暫くすると、奴らは殺気をおさめ、薬を買い、立ち去った。薬屋の婆さんすげえ。この殺気に耐えたのか。いや、そうじゃなくて。周りには倒れている人々。奴らはそれに見向きもせず立ち去っ

ていった。気付かなかった？ いや、有り得ないだろう。常識的に考えて。

「カイト・リーブルは、消すべき」……」

学園長に言われた通りだ。あいつは俺たちにとって毒にしかならない。

俺は学年のリーダーのような存在で、周りからは頼られている。そして、各学年にもそんな人たちはいる。

リーブルがこの学園に来て暫く経ったある日、俺とそのリーダー的存在の人たちは学園長に呼び出された。

何故呼びだされたのか。その理由はただ一つ。リーブルのことだ。「あの子はこの学園を成長させてくれる良いきっかけになるかもしれない。だけど、強力な毒になる可能性もある」

そう、言われた。

謂わばあいつの力は両刃の剣なんだ。正しい使い方もつはをすれば、それなら良い。だが、間違った使い方をすればあいつはきつと自滅するだろう。

別に、それだけなら良いんだ。あいつが一人で消えてしまおうとも、俺は構いやしない。

だけど、マキとミックは駄目だ。

あいつらは駄目なんだ。あいつらだけは失いたくない。
なあ、頼むから。これ以上俺たちの平和を乱さないでくれ。なあ、
頼むから。

「消えてくれないか……？」

震える身体を押さえ、俺は呟いた。

「消えろよ」

俺は立ち上がり、学園に戻るために移転魔法を唱えた。報告と、
町の人々をどうにかしなければならぬ。

民を脅かす悪の味方

（悪ならば、消してしまえば良いのさ）（悪だと思い込んで）、
消してしまえば良いのさ）

民を護る正義の味方（後書き）

その力を“毒”にしない方法が、きっとあつたはずなのにね。

バターと牛脂間違えるとどうなるかなんて知らない。

意外と美味しくなったりして。ないかな。

薬屋の婆さんはきっとこの作品で一番強い。

ワクチンをどうぞ

「はあ……、」

「はあああ……」

重なったため息。前者の浅いため息は俺で、後者の深いため息は俺じゃない誰かだ。

「ん？」

「……んん？」

横を見る、と相手も俺と同じく此方を向いていた。顔を見合わせて、俺たちは首を傾げた。

この間の事件から、俺はあることを決意した。

それは、リーブルとその取り巻きたちの排除だ。リーブルはきつと毒にしかない。あいつは、きつと流行病^{はやりやまい}みたいなものなんだ。

あいつが存在していればどんどん感染者は増えていく。しかも、それはあまりにも短期間で治療のしようが無いほど強く強く感染者の心に根付いて、毒で犯していくんだ。

ソレイトはまだマキの存在のほうが大きかったみたいで戻ってこれたようだが、感染者はきつともうこっちは戻ってこれない。

なら、もうそれは切り離すしかない。

新たな決意を固め、学園長室のドアを四回ノックした。
入ってもよいとの返事が来たので遠慮なく入らせてもらった。

「学園長、」

「やあやあやあやあ！　よく来たね！　さあ入っておくれよ！」

「……は、はい……」

学園長は相変わらずハイテンションだ。リーブルのことについて話してる時はあんなに静かだったのに。

……まあ、それはこの人の中で学園長の顔になるときと、ただの子供好きの男の顔になる時との切り替えの問題なのだろう。本当に大事なときにはしっかりしているし。

「さて！　この前の町人バツバタ事件のことについてだけれど……、」

「そのネーミングセンスはどうかしたほうが良いと思いますよ」「ん？　そうかい？」

バッタバタ……。彼は町人たちをいつたいなんだと思っているのだろうか。

果てしなく失礼だ。

「まあ、いいや。で、それについてだけど！ 私たちも考えた。考えに考えて考え抜いた！！」

「嘘でしょう」

「バレた？」

まるで悪戯好きの子供のように笑い、そして、それは一瞬にして冷徹な笑みへと変わった。

相変わらず表情の性質の変化が鮮やか過ぎて寒気がする。

「まあ、私“たち”って言うのは嘘だけど、考えに考えて考え抜いた、っていうところは嘘ではないよ」

そして、学園長は嘘っぱい悲しそうな顔をしてみせた。鳥肌が立った。

「私はあの子がこの学園にとって良いモノになると、最初は信じて疑わなかったんだ！ なんだって彼は大賢者の息子だよ！？期待しないほうが可笑的じゃないか！」

まるで劇のように大袈裟に嘆く素振りを見せ、俺の頬を人差し指

で突きながら「ねえ？」と同意を求める。

常々思っていたが、この人は少しスキンシップが過ぎると思う。

この間なんて挨拶代わりに女生徒を抱き締めて「セクハラ！」だなんて叫ばれていた。それでも懲りないのが学園長だ。

馬鹿みたいなことを考えていた俺だったが、ふと、学園長の言葉に少しの違和感を感じた。

「……、それ、“大賢者の息子”に期待してただけで、“カイト・リーブル”自身には期待していなかった、ということですか？」
「何を言っているんだい？」

きょとんと不思議そうな顔をして、学園長は首を傾げた。

ああ、俺の勘違いだったか。失礼なことを言ってしまった。そう思い、謝罪の言葉を述べようとすると、

「当たり前じゃないか！ あの子にそれ以外に良いところがあるのかい！？ 子供らしい素直さも純粹さも無い！ たただだ頭が良いだけのポンコツをどう愛せて言うんだい！ いいや、私はあれを子供だとは認めないよ！ 私の愛すべき可愛い美しい子供が！ あんな胸糞悪いモノであるわけが無い！！」

学園長は怒涛の勢いでそう絶叫した。俺は学園長の勢いに押されて、何も言えなかった。

こういうときの学園長は、少し、恐ろしい。
震える唇をやっとの思いで開いた。

「そ、それじゃあ、俺も似たようなものではないのですか？」
「うん？」

「俺は素直でも純粹でも無いし、自分で言つのもなんですが、頭が
良いだけのポンコツ、」

ばちんと派手な音を立てて、俺の両頬は学園長の両手に挟まれた。
痛いです学園長。どさくさに紛れてふにゅふにゅと俺の頬を堪能
するのは止めて下さい。十七の男の頬なんてもう柔くもないだろ
うに。

「嗚呼嗚呼私は悲しいよ！！ 君がそんなふうに己を貶めるような
発言をするなんて！！ なんとしたことだ！！ 悲しみで私は眩暈
がしてきたよ！！ 悲しくて哀しすぎてでも愛おしくて今すぐにで
も君の首を絞めてしまいたいくらいだ！！」

「ふいまふえん、学園長」
はふへんひょう

「よし、良い子だ。それじゃあこの手を離してあげようかな」

にこにこ笑い、俺の頬から学園長の手が離された。「顔が真っ
赤だよ、可愛いね」その原因が貴方であることを忘れないでいた
だきたい。

ヒリヒリする頬を擦り、恨めしげに学園長を見ていると、ノック
の音がしてある人が入ってきた。

ちなみにノックは二回。トイレノックだ。……意図的なものなの
だろうか……。

ノックの主は学園長の返事を待たずに入室し、俺の顔を見て少し

だけ驚いたような顔をした。

「あれあれあれまあ、誰かと思えば君だったのかい。まあ、君はこの人のお気に入りだしねえ」

「先輩……」

「おやおやおやまあ、私のことはスージー様、もしくはスージーちゃんと呼びなさいと言ったじゃないか」

「すいません、先輩」

「あれえ？」

彼女はスージー・カーヴアル。俺の一つ上で、俺と同じく学年のリーダー的存在だ。ちなみに、ラージー・カーヴアル 学園長のことだ とは親子だ。

「ああ、父さん。カイト・リーブルの家に行ってきたんだけど、だあれもいなかったんだよ。こういう場合は如何すれば良いんだい？ 私は彼らと重要な話をする事が出来ないじゃないか」

「父さんじゃない、学園長と呼びなさいとあれほど言っただろう！」

「ごめん、父さん」

「おやあ？」

なんともよく似た親子だ。

「……まあ、いいや。スージー、君はそんなことを言っているも、

どうせ君のことだからすでに居場所は掴んでいるんだろう？ で、会ってきたんだろ。なんて言ってたんだい？」

「あれあれまあ、さすが私の父さん。気持ちが悪いくらいほどに私の行動パターンを把握しているんだね。鳥肌が立ってきたよ」

先輩はいつもの無表情で白い腕を擦りながらそう言い放った。本当に鳥肌が立っている。

「嫌な褒め言葉はやめなさい！」

「褒め言葉では無いよ。気持ち悪がっているんだよ」

「おやあ？」

「まあ、それは置いといて、」

コホン、と一ツ咳払いをして、「あー、あー」と声を出している。多分声の調節やらなにやらをしているんだろう。

俺は先輩のような器用な真似は出来ないのでよくわからないが。

「それは全て、私には関係の無いことだ。息子には謝罪をさせるなり、責任をとらせるなり、なんでもしてやってくれ」だそうだよ」

相変わらずの声真似のうまさだ。こんな綺麗な人からあんな低い男の声が出てくるとは誰も思えないだろう。

どうしてこの親子たちはこう変なところまで器用なんだか。

「おや！ この責任感の無さは遺伝かい？」

「遺伝だね」

「まあ、きっと彼もやはり、リーブルクンを自分の息子としてでなく、自分の強大な力としか見ていなかったというわけだね！」

「そうだね。あの子は両親と和解出来たと涙を流して喜んでいたよ
うだけど。それを思うと、とても可哀想に思えてくるよ」

「嘘だろう？」

「ああ、勿論」

「あの……、学園長」

このまま放っておくと、いつまでもこんな感じの会話が続きそう
だ。

しかも二人とも地味に早口だからなんだか忙しなくて聞いている
此方が疲れてくる。

俺は二人の間に割って入って、学園長に話しかけた。

「なんだい？」

「結局、リーブルはどのように？」

学園長は唇に人差し指を当て考え込んだ。妙に仕草が婀娜あだつぽく
て気味が悪い。先輩はそんな学園長の姿を見て鋭く舌を打っていた。
笑顔でかわした学園長は俺のほうに向き直り、俺の鼻をぴんと弾
いた。痛い。

「とりあえず今のところは保留だよ」

「保留……ですか？」

あれほどリーブルを嫌がっていたから、今すぐにも処罰を与えるのかと思っていた。

いや、しかしそれでは大義名分のようなものが薄いように思われるし、いくらなんでも軽率過ぎるか。

「それじゃあ、私はスージーと大事なだあいじなお話をするから、悪いけど席を外してくれないか？」

「は、はあ……、」

生返事を返し、何処か納得がいかないながらも退室しようとする
と先輩に引き留められた。

「父さんから呼びだしたというのに、すまないね。お詫びにキャンデーをあげようかな」

「いりません」

「あれえ？」

何をきよんとしているのか。

学園長は「あ、」と思い出したように俺を見た。

「そうそう。この話は君が役に立つと思った人、もしくは本当に信頼出来ると思った人になら話しても良いよ！」

用はそれだけだったようで、言い終わるとさあ出てった出てったと俺の背を押し、外へと追い遣った。

いつもながら、学園長の考えが俺には推し量ることが出来ない。俺はため息を吐いた。

「はあ……、」

「はあああ……」

「ん？」

「……んん？」

そして冒頭に戻る。

「……お前か。どうしたんだ、ため息なんか吐いて。何かあったのか？」

「先生こそ、どうかされたんですか？」

俺と同時にため息を吐いたその人は、リーブルのクラスの担任の先生だった。

先生は気まずそうに申し訳無さそうに視線を宙に漂わせて、重い口を開いた。

「……あんまり……、生徒に話すようなことじゃ無いと思うんだが、聞いてくれるか？」

俺は無言で頷いた。今は放課後だ。時間なら有り余っている。

「入ってくれ。ちょっと汚いけど悪いな。最近、家に戻る時間が取れなくて……」

「いえ、大丈夫です」

本当に申し訳無さそうな言葉にゆるりと首を振って答えを返した。誘われたとはいえ、急に押しかけたのは此方のほうだ。寧ろ謝るのは俺のほうだろう。

失礼にならない程度に部屋中を見渡せば、うつすらと埃が積もっている場所もあった。本当に帰る暇が無いんだろう。

俺の答えに先生は微笑んだ。それはあまりにも疲れ切った儂い笑顔だった。

「……そうか。なら良かった」

先生に勧められたので木で出来た椅子に座らせてもらっ。目の前の小さな丸型の机に先生は紅茶の入ったカップを二つ置き、俺の向かいに座った。

ありがとうございます、と軽く頭を下げると気にするなと頭を撫でられた。

「……その、少し悩んでることがあつてな、うちのクラスの学力が著しく低下してるんだ」

「……学力低下？」

予想外の言葉に思わず瞠目する。先生は暗い表情で頷いた。目を伏せ、揺れる紅茶の水面を弱々しく睨みつけている。だがすぐに視線を外し、固く目を瞑って次に俺を見た。

「ちゃんとやつてる奴もいるんだ。だけど、平均的に見れば、」
「かなり下のほう……と」
「最初と比べてな」

はああ……、と先生はまたもや深いため息を吐いた。物凄く気の毒になった。

出来ることならば俺も協力しよう。そう思い、俺は訊ねた。

「原因などはわからないんですか？」
「いや、わかつてる」

しかし、先生は一向にその原因を打ち明けようとしな。視線を右往左往させ、酷く言い淀んでいる。

「先生、」

語気を強めて言う。先生は観念したようにちらりと俺の顔を見た。

「……リーブルが、どうやら原因みたいだな。しかも学力が落ちてるのもリーブルと仲が良い奴らばかりだ」

「リーブル……」

「ああ」

先生は頭をがしがしと乱暴に搔いて、紅茶に口をつけた。俺のぶんも淹れていただいていたから飲んでみる。

少し冷めた紅茶が喉元を滑り落ちる。うめえ、なにこれ。

「リーブルはな、とても頭の良い生徒だ」

「っはい、」

紅茶のことを考えていて返事が遅れた。どうしよう、これ本当にうまい。また何か話す機会があれば淹れてもらおう。

いや、紅茶のことを考えてる場合じゃない。俺、本当馬鹿だ。先生の話に集中しないと。

「だから、授業をしていても、あいつ、予習とかも毎回してる

みたいでな。それは凄く、偉いよな。 答えを先に言われてしまうことがあるんだ」

ああ、そういう奴よくいるよな。手を挙げるって言うてんのに挙げないで勝手に答えたりとかする奴。それで後からふざけんなっていじられてる奴。

「それでリーブルはその答えを、答え“だけ”を仲の良い奴に教えていて……、」

……なんとなく、先が読めてきた。
物凄くくだらないけど、物凄く大切なことだ。

「つまり、他の生徒の考える場をリーブルが奪ってしまっていると？」
「ああ。……何も考えてないんだから、どんどん頭の力が弱くなるのも当たり前だよな。このままじゃ、あいつらの将来が……、」

先生は顔を真っ青にさせて両手で頭を抱え込んだ。大切な生徒の大切な将来の問題だ。そりゃ頭が痛くなるのも頷ける。

「別に、あいつらが失脚したって良いんだけどよお……、その皺寄せが俺に来るから……」

不穏な一言が聞こえた。

「ほ、放課後に残させて補習を組んだりだとか……、」

苦し紛れの案を出してみる。しかし先生はすでに試していたようで、駄目だった、と重い響きの一言を落とした。

「……残ったの、シグナルとチゼツタとディベントだけだったんだよ。あとはたまに他の奴らがチラホラと……」

「任意ではなく、強制にしてみても……」

「それでした」

「だけど、あいつら逃げるんだよ」と先生。ああ、なんだか想像出来てしまう自分が嫌だ。

本当に先生が可哀想になってきた。

「引き留めようにも情けないことにあいつら、特にリーブルは俺よりも強いから……」

「……………」

「気絶させられて、気付けば保健室に横たえられてて、て……貞操の危機に晒されて……」

「あああああー!!」

涙を抑えるように小さく呻き、先生は目頭を押さえた。

と、扉が……！ 封印されしトラウマの扉があああ……！！！！

保健の先生は男性だ。しかし本人は乙女などと自称している。人より少し変わった性癖を持つ乙女なのだと。

一度授業で大怪我したことがあって俺は勿論保健室に連れていかれて、……とりあえず死に物狂いで脱出した。それ以来保健室には近付かないようにしている。

「お、おい、真っ青だけど、大丈夫か？ どうした？」

「えっ！？ あっ、いや、大丈夫です、はい」

俺の顔を心配そうに覗き込む先生。必死に誤魔化すと先生は渋々ながらも身を引いてくれた。本当に良い先生だと思う。もしかしたら察したのかもしれないけど。

「……先生、俺たち、今考えてることがあるんです」

「、考えてる……こと？」

唐突な話題の転換に少し戸惑ったような先生だったが、俺はそれに構わず言葉を続けた。

弱った心に、歪ひずんだ心に救いの言葉は驚くほど甘く融け込む。

酷いとは思っていても、もう止まる気はない。傷など癒さずに残してしまえ。

「はい、」

あいつらを消してしまおうって。

囁いた言葉に、先生は瞳に読み取れぬ感情を浮かばせた。

ワクチンは捨てた

（何も出来ない）（なら、もう何もしない）（そのまま消えていなくなってしまう）

ワクチンをどうぞ（後書き）

長いよ馬鹿！

そして自分の語彙量に泣きたくなった。

学園長の台詞のあとは地の文を入れにくい。

私がそうだからかもしれませんが、人っていうのは結局面倒事から逃げたがるものです。

きっと誰も何かしてやるつもりなんてなかったんじゃないかなって、そういう話。

慎重という名の強さ（前書き）

ぐだぐだ注意報。

慎重という名の強さ

「……“リーブルと一緒に魔物の討伐をしろ”？」

いきなり学園長に呼び出されたかと思えば、俺は学園長にそんなことを言われた。少し言葉の意味が理解出来ない。

「相変わらずつまらない冗談が好きですね」

学園長は何も言わずににこにこしている。

……どんなに言葉を尽くそうとも俺をその任務に就かせる気などだと、嫌でもわかった。

しかし、醜い悪あがきをしたくなるのが人間というもの。

「“あのこと”を見極めるのは別に俺でなくとも……、」

「それが適任が君くらいしかないんだよ！ わかってくれ！」

嘘を吐けと言いたい。そんな楽しそうな顔をしておいて、何を言うのか、と。

せめてそのゆるゆるになった口許を隠してから説得にかかったらどうだ。

「今、リーブルクンがどんな状況におかれているのかを一番知っているのは君とスージー！ それなりに力があつて一番あの子と歳が近いのは君！ あの子と直接会って話したことがあるのも君！」

学園長は座っていたふかふかの椅子から立ち上がり、どんどんと俺を追い詰めていく。

近い、近い。学園長、後ろはもう出入り口です、下がれません。離れて下さい。

「そして今、都合がつくのも、君だ」

輝かしい笑みを見せ、学園長は俺の鼻先すれすれに指を突き付けた。近過ぎる人差し指がぼやけて見える。

「リーブルクンが“ ”になれるかどうかの報告を、待っているよ？」

返事の代わりに出たのはため息だった。

学園長室から追い出された俺は、あの後すぐにリーブルたちのいる高等部一年生寮へと向かった。

廊下を歩いていた見知らぬ後輩にリーブルの部屋を訊き、やはりリーブルは有名なのか、すんなりと答えが返ってきた。教
えられた部屋へと急ぐ。

ノックをすれば思ったよりもかなり早くドアは開き、リーブルが顔を覗かせた。俺を目にした途端に瞳が輝いた気がしたのは気のせいだろうか。

俺とリーブルとで任務に行くことになったという主を伝えると、少し驚いた様子だったが、すぐに頷いた。
やけに生き生きとしている。何があつたのだろうか。

「装備とか回復薬とか、そういったものを、そうだな……、三日後までには揃えておけ」

任務前にはお決まりの言葉を言い捨ててすぐにこの場を去ろうとすると、慌てた様子でリーブルが俺の肩を掴んできた。
咄嗟に、手を振り払ってしまった。

「ちょ、待って！ オレはもう行けるぜ？」
「そうだとしても確認をしておけ。それにお前が大丈夫だとしても俺には準備がある。人の都合を考えろ」

都合を考えるのは寧ろ俺のほうじゃなからうか、と理不尽な言葉

を浮かべ、口に出せと命令した脳味噌で考えてみる。

魔物の討伐ならばだいたい早ければ早いほうが良い。だというのに“都合が悪い”などと馬鹿げた文句でその時間を引き延ばすのは、少し正気の沙汰ではない。

しかし、こんな物言いをされてもリーブルは何も言わずにただわかったとだけ返した。

これには少し驚いた。見聞きしている限りではリーブルはこんな場面は口答えして、寧ろ相手を返り討ちにする勢いなんじゃないのか。

まあ、面倒がなくなっただ、喜ぶべきかと思ひ直す。

「ああ。あと、一人じゃ心配だったら、付き添いを二人まで連れてきても良いらしい。……まあ、自由にしろ」

リーブルの返事などは聞かずに、俺は早々にその場を立ち去った。

三日後。

俺は、カイト・リーブルの部屋の前に立っていた。肩には薬やらを入れた鞆がある。ずしりと重い、とまではつめていないが、そこそこの重量だ。

「……………なんだかなあ……………」

この部屋付近、やけに息苦しい。別に魔法がかかっているだとか、何か特殊な仕掛けがあるわけではないのだろう。

だけど、息苦しい。というよりは不快だと言ったほうが良いのかもしれない。

そんなことを考えてみたからって今のこの状況が変わるわけでも無く、深いため息を吐き、四回、ドアに手の甲を強くあてた。

俺も寮住まいだからわかるんだが、結構このドアは分厚くてノックは強く叩かないと聞こえないことがあったりする。

「あ、も……………もう来たのか！　上がって……………」

中の様子をさり気無く窺う。リーブル以外に人の気配は無い。……………まあ、予想はしていた。これは学園長が求めているものとして良いのか、悪いのか。

良いように言えば敵に臆せず向かっていけるということだろう。悪いように言えば、己の力を過信しすぎているが。

「そんな時間はない。さっさと準備をしろ。行くぞ」

そう言い捨てて、俺は部屋を立ち去った。

息苦しさを乗り越して吐き気を感じてきた俺の心は、もう此処に居るのは限界だと大声で訴えてきていた。

後ろから慌てた声と足音が聞こえ、それはすぐに俺の横に並んだ。何かを俺に話しかけていたが、そんなものを気にする余裕が今の俺にあるわけもなく、それらは全て完全に無視していた。

だが、どうしてもそれは俺の頭の中に入ってきてしまう。

俺は気を逸らす為に、魔術の本を取り出し、読み始めた。しかしリーブルはそれにもめげずにまだ話しかけてくる。なんだこいつ。

「それで、……。なあ、大丈夫か？ 顔色が……。」「ッ 俺に触んじゃねえッ！！！！」

俺に触れようとしてきたリーブルの手が、それはヒトの手だというのに、何か違う化け物のように思えて、咄嗟に俺は持っていた本でリーブルの手を払った。

ばしん、と派手な音がして、リーブルの手が俺から遠ざかった。手を赤くして、呆然としたリーブルが俺を見る。その顔は、傷ついたような顔をしていた。

今更、同情、するな。

あいつが、ただの子供だというのは理解している。

あいつが、ただこの学園にさえいなければ、きっと偉大な魔法使いになれたということは知っている。

あいつが、ただの、ある意味で無知過ぎてしまった子供であるということとはわかっている。

俺たちが今、どれだけこいつにとって残酷なことをしようとしているのかも、自覚、している。

だけど、それでも、こいつは俺の友達を傷つけた。

今更同情をするのは、マキとミックにも、こいつにもこいつと関わった全ての人に失礼だ。

俺は潔く、一方的にこいつを“悪”にして、自らを“善”と思いこまなければならない。

そうしないと、馬鹿みたいだ。

俺はあいつの表情を見て見ぬふりをして、先を急いだ。少し間を開けて、それでもすぐに俺の後ろについたのが気配でわかった。

「此処……、なのか？」

不気味な雰囲気が漂う遺跡を見つめ、リーブルは俺に訊ねた。

「ああ」

短い返事を返して、俺は中に神殿に足を踏み入れた。リーブルもすぐに俺を追いかけて中に入ってくる。

中は暗く、とてもじゃないが普通に入っていていつて何かを捜したりだとかが出来る明るさではなかった。

俺は魔法で掌の上に小さな光の球体を出現させた。これで幾分かはマシになるだろう。

硬い石の床を進んでいく度に、こつこつと独特の足音が遺跡内に響く。周りの雰囲気とこの薄暗さも相俟って、何処か気味の悪い感覚が俺を包んだ。

「な、なあ、魔物の討伐とか言ってたけど、いったい何を倒すんだ？」

そういえば言っていなかった。なんて失態だ。

いくら相手が嫌いな奴だからといって、こんな重要な情報を教えていなかっただなんて。

「悪い、教えてなかったな。俺たちが倒すモンスターは、虎のような姿をした奴だ」

「虎……」

「ああ。……見た目は可愛いけど、油断するなよ」

ないだろうが一応という思いで注意を促すとリーブルは得意げに鼻をふふんと鳴らして言った。

「大丈夫だって！ なんとって俺はあの大賢者の息子だぜ？ 学園でも学年内なら成績トップだしな！ 余裕、余裕！」

「……そうか」

余裕、ね。俺は少しだけ目を細めて、リーブルを見た。

此処らへんの要素は役に立たない。いや、寧ろ、いらぬ場所、あっちゃいけないものだ。

ふう、と悟られぬように一つため息を吐くと、小石が転がる音が10、11mほど先にある柱の影から聞こえた。

「ッ
！」

俺は咄嗟に地面を蹴り、後ろへ飛ぶ。横を見れば、リーブルもそれに気付いていたようで、俺と同じ方向に飛ぶ。

実力面は問題無い。それどころか俺よりも優秀だろう。

「女……？」

視線を外し、前を見ると其処にいたのは女だった。

美しく、なんとも言えない色香が漂っている。女は妖しげな笑みを浮かべ、俺たちに近付いた。

「ねえ……、こんなところで何をしているの？」

首を傾げ、くすくすと笑う女。そのせいで首からさらりと胸元に髪が流れた。ドクリ、と胸が大きな鼓動を奏でた。

かあつと顔の温度が上がった気がする。これも浮気になるんだろうか。いや、違うんだ。そんな疾しい思いは無いから。

なんだ……。何かが可笑しい。横目でちらりとリーブルを窺ってみると、何処か余裕そうな表情で女を見ていた。
こいつはいつも余裕そうな顔してるな。

「……あんたこそ何してんだよ」

阿呆かお前！！思わず怒鳴りつけそうになった。
どうしてそんな得体の知れない奴に返事を返したんだ。馬鹿だ、阿呆だ。そうだとしか言いようがない。

「さあ、何かしら……？」

また、笑う。ふふ、くすくすと女の笑い声が耳元で聞こえたような気がした。

何処からか吹く生温い風が俺の頬を撫でる。不意に香った甘い香り。

これは……。

「ッ！」

こいつ……、淫魔か！！

淫魔は字の通り、人間の異性を色で惑わす悪魔だ。

こうして目の前に姿を現すだけでも人を惑わせることは出来るが、一番効果的なのは自分の目を見させることだ。

目を合わせることによってより強い誘惑の呪いをかけ、相手を自分の奴隷と化すことができる。

リーブルは奴が淫魔だということに気付いていたらしい。だが、それでも奴から目を離すことはしない。

目は合わせていないようだが、それでも何を考えているんだ。自分なら大丈夫だと、そんなことを思っているのか？

どうする？ 言うべきか？ でも不用意なことをして相手を興奮させたらどうなるか……。

「ねえ……、私の目を見て？ 寂しいわ」

「っ、」

淫魔は瞬間的にカイト・リーブルの傍に移動し、両頬に優しく手をあて、自分と向き合わせようとする。

ああ！ 言ってる傍から！！ まずい……！！

「っ目を閉じるー！！」

「ー！！」

咄嗟にそう怒鳴るも、もう遅い。

リーブルと淫魔の視線が、今、ゆつくりと合わさった。そして、攻撃を加えようとしている俺に気が付いたのか、すぐに後退する

「っ、あ……」

一気にリーブルの瞳からは光が失われ、脱力したようにぶらんと両腕を垂らした。

だが、それでもやけにしっかりとした足取りで淫魔のほうへと一歩、一歩近づいていく。

淫魔は己のもとへやってきたリーブルを見て、嬉しそうな顔をした。顔の良い男が自分のモノになって喜んでいるのだろうか。

そして、今度は俺のほうに顔を向ける。俺は咄嗟に顔を下に向ける。そして、少し遠くにある影に気が付いた。

淫魔のほうを見ないように注意して、すばやく其方に顔を向ける

（勘弁してくれよ……）

俺の心境を一言で表すとするならば、それが最も的確な言葉だった。

其処にいたのは、俺達が討伐する予定だった魔物だ。

奴は、とても愛らしい姿で、攻撃力等も低く、一見無害なモンスターに思えるが、とことん狡賢い。

自分の力が及ばない敵と見えると、奴らはそいつが窮地に陥った時にやってきて、攻撃を加える。ああ、今がその時だな。

淫魔は強い。淫魔というものは悪魔の一種だから光の攻撃が良く効く。幸い、俺は光の属性だ。

だが、この遺跡は闇の神を信仰する神殿だったらしい。俺の魔法は必然的に弱体化してしまう。

淫魔が一体だけなら、こんな状態のリーブルがいなければ、勝て

たかもしれない。でも、確定は出来ない。

（まずい、よなあ）

移転魔法は神殿等では使えない。神殿という建物自体にそんな魔法がかかっているからだ。何故かかっているかは知らないが、考える。考えるんだ。このままじゃ、

（俺は死んでしまう）

嫌な汗が一筋俺の頬を伝った。

俺の考えていることがわかったのだろうか、奴は余裕そうな微笑みを携え、言った。

「ねえ、あなたもこっちに来て？　大丈夫、怖くないわ。ほおら、こっちへ……、」

奴のその声に、どうしようも無く心を揺さぶられる。駄目だ、誘惑に乗るんじゃない。

「くそ……」

仕方ない。消耗が激しいが、命には代えられない。

「ッ我と契約を交わせし者よ！ 今、光り輝くその姿を現せ！！」

掌をバツと前に出し、叫ぶ。瞬間、俺の体内から大量の魔力が抜けていく感覚がした。

気持ち悪い。俺はリーブルのように魔力が化け物並みにあるわけじゃない。普通にキツイ。

光で作られた魔法陣から、雄々しく気高い咆哮を上げ、俺の目の前に、使い魔のキーちゃんが現れた。

可愛らしいあだ名に反してかなりの強面だ。でも普段は仕草が可愛いんだ、仕草が。でかいけど。

「なッ……！？」

いきなり現れた自分よりも格上の存在にさすがに危機感を感じたのか、淫魔は一目散に逃げていった。

しかし、それをキーちゃんが許すはずが無い。すぐにキーちゃんは淫魔に追いつき、その鋭い爪で淫魔を引き裂いた。

なんかキーちゃんキーちゃん言ってるって緊迫感薄れてるけど死にそうな思いしてたからな、俺。

「っぎゃあああああああ！！」

醜い悲鳴を上げ、一瞬にして燃え盛る炎にまかれた淫魔。
ちなみに悪魔は死ぬと地獄の業火に焼き尽される。

とりあえず、一安心だ。あの虎の魔物たちもキーちゃんの姿に恐れ慄^{おのの}いて此方へやってこない。

……だが、そろそろキーちゃんを出したままにするのが辛くなってきた。魔力が減ってきたからだろう。

俺はキーちゃんを帰し、魔力回復の液状の薬を口に含み、飲み下した。苦い。余談だが、薬屋のばあさんの口癖は“良薬口に苦し”だ。

「次は“あいつら”、だな」

いつの間にか仲間を呼び、俺たちの周りを取り囲んでいるモンスター。キーちゃんを帰したことでまた奴らの士気は上がってきているようだ。

ちなみにリーブルはやつと正気に返ったのか、頭を数度振り、辺りを見渡して冷や汗を流していた。

「なつ、なんだよこれ！ なあ、何があつ……」
「話は後だ！！ 来るぞつ！」

まるで猫のような高い声を上げて俺たちに向かってくるモンスター

！。

一体ならただの雑魚だが、それが何十もいるとなると脅威になる。

「っ、クソッ！」

「ぎゃうっー！」

光の槍を魔法で形成し、それで俺に向かってくる奴らを薙ぎ払った。だが、一匹を取り残してしまい、右腕に噛みつかれる。

「ぐ、あつ……！」

俺は右手で持っていた槍を左手に持ち替え、俺の腕に噛みつくそれを突き刺した。断末魔を上げる間も無く絶命したそれからは血が噴き出し、脱力した。

槍を持ちあげれば容易に俺の腕から虎の口は離れた。

白目を剥き、ブランと俺の持つ槍に貫かれたままぶら下がるモンスター。

俺はそれから目を逸らし、すぐに地に投げ捨て、俺の背後に迫った違うモンスターを攻撃した。

すると、リーブルの声が聞こえてきた。

気付いていなかったが、いつの間にか俺とリーブルは離れていた。そこそこの距離だな。わざわざそっちに行くまでも無いか。

「闇に蠢く亡者よ、その腐臭漂う地獄から今、蘇れ！ 魔の皇よ、漆黒に輝き、我が前に現れん！ 我が名はカイト・リール。貴様らを使役する者なり！！」

詠唱が長い！！

というかなんで闇の神殿で闇のモノを召喚しようとしてんのあいっ！？ 闇の神殿で闇のモノ召喚したからって強化されるわけじゃないぞ！？

ああああ……！ 今すぐぶん殴ってやりたい！

場所によって出現する魔物の属性などはだいたい決まってくる。闇の神殿なら、勿論闇属性の魔物が現れる。

いくら奴の放つ魔法が強力だったとしても大幅に威力が下がってしまう。

（だから、長いつて！！）

どうやらリールの使う召喚魔法は魔力をためることも必要らしく、まだ召喚が出来ていなかった。そして、そんなあいつの後ろに迫る魔物。

攻撃をしてあれを殺す時間はない。あいつはあれに気付いて無い。

「このっ……、馬鹿野郎ッ！！」

俺は今までに無いほどに速く走り、あいつの後ろに立った。

俺はただ“速く走る”ということだけを考えて動いていたから、防御するなんてこと、まるで考えちゃいなかったから、俺は無防備で。

「っあ、あんた、何してッ……!？」

がら空きだった俺の腹に、小さくも鋭い爪が喰い込んだ。
獰猛に光る円^{つぶ}らな瞳。肉を喰らおうと開かれた牙が鋭く光る口。

(……俺、死ぬかも)

「……ここまでが、俺が覚えていることです」
「そうかい。やはり、あの子にはもう何も期待出来ないようだね」
「、はい」

俺は今、白い棚に白い床、白い壁に白い天井、何もかもが白い部屋
保健室のベッドに横たわっていた。

保健の先生は学園長に追い出してもらった。学園長も少しあの先生は苦手なようだった。

腹が痛むは、マキたちには大人しくてると怒鳴られるはでかなり
災難だった。

そんなこんなで暇をしていたときに、学園長がお見舞いに来て下さって、俺は二日前に起こった事の顛末を事細かに話した。

ちなみに腹の傷を魔法で治していないのは、魔法に頼ってばかりいると身体の治癒能力が低下して、少しの傷でも致命傷になり得るからだ。

便利に見えて、こういうところは不便なのが魔法だ。

学園長は俺の話を聴き終えると深いため息を吐き、それからこりとした。

あからさまにはつつけられたその仮面に思わず眉を顰めるとでこぴんを喰らった。

「ふふっ……、あはははは！！ 全く、あの子には呆れ果てるねえ！！！！！」

学園長は高笑いしたかと思えば、その瞳に怒りを滾らせ、怒鳴った。

どうして俺に向かって怒鳴るんですか。その怒りを向けている先が俺ではないとはわかりきっているけれども。

「……過信、過信！ 過信！！ 過信！！！！ あの子の言葉と行動にはそれしか感じられないよ！！！！！」

学園長はまたくつと嘲るように笑うと俺の頭を撫でて顔を覗きこんだ。

胡散臭さが漂う端正な顔立ちが眼前に迫って、思わず身を引いた。

「さあ、もう結果はわかりきっているが、一応聞かせてはくれないかい？ 君の意見を」

「……はい。リーブルは、あいつは、」

どうしてか喉がからからに渴いている。なんだか緊張して、唇を舐めて湿らせた。

「“生物兵器”には、成り得ません」

「ああ、それで？ その考えに至るにあたったその理由は？」

学園長は俺が横たわっているベッドのすぐ横にあった椅子に腰かけた。

それから「はい、どうぞ！」とにこやかに“マイク”の手を俺の口元に差し出し、続きを促す。俺は、ゆっくりと口を開いた。

「……一つ目、リーブルは俺が“付き添いを連れてきても良い”と言ったにも関わらず、協力を求めなかったこと」

学園長がこくりと頷いたのを見てから、俺はまた続きを話し始めた。

「それは自分に自信が有り、敵に臆せず向かっていけるということでもあります、言いかえれば過信、です」

学園長が、おっしゃられたように。呟くように言えばくすりと小さな笑い声が聞こえた気がした。

ベッドの皺を睨みつけながらシーツを握り締め、続けた。

「二つ目、先程言った通り、俺達は予想していなかった敵と遭遇しました」

「淫魔、だね」

「はい」

今、思い出しても背に何か冷たいものが伝い落ちるような感覚が拭えない。

予期せぬ敵と出会うことほど恐ろしいことはない。その敵と戦うための準備が全く整っていないのだから、何かの拍子に万が一が起きても可笑しくはない。

「俺は少し経ってからそのことに気が付いたのですが、リーブルは最初から気付いていたようでした。このことから、実力面には問題はありません」

「だけど？」

「奴は、あれが淫魔だと気付いても、尚、目を逸らさずに挑発的な態度をとっていました」

「そして短時間とはいえ、操られてしまった、と」

無言で俺は頷いた。ずきりと腹の傷が一際痛んだ気がした。

「三つ目、闇の気配が少しは薄まっているとはいえ、闇の神殿で闇の魔法を使用したこと」

あの行動は本当に理解が出来なかった。優秀なリーブルが、このことに気が付いていないはずがないのに。それとも、なんらかの意図があつてのことなのだろうか。

「やはりリーブルのことですから、あのモンスターが闇の属性であることは気付いていたでしょう。ですが、それでもリーブルは闇のモノを召喚しようとしていました」

「続けてくれるかい？」と学園長。

ああ、なんだか気分が悪くなってきた。吐き気が、する。

「拳句の果てモンスターに囲まれているにも関わらず、呪文の詠唱に気を取られて背後にいるモンスターに気が付くのが遅れていました」

「うん」

「そして俺が奴を庇い、傷を負いました。でも、この傷は俺の実力が足りていなかったからです」

「そうだね」

気休めにしかない慰めはなく、学園長は俺の言葉を肯定した。そう、これは確かに俺の実力が足りていなかったために起こってしまったことだ。

もつとよく考えて、あのとき最も適していた行動を取らなかったがために、こんな馬鹿みたいな傷を負った。

「……それでも、正直、俺一人であつたほうがまだ容易くこなすことの出来た戦闘だと、思っています」

「うん、よくできました」

学園長はまた俺の頭を撫でた。

「ああ、」と思い出したように学園長は声を漏らし、俺の頭の上から手を退かした。

「もう一つ、訊いてもいいかい？」

「……はい？」

「君がそんな行動に出たのは何故だい？ まさか、同情したただなんてそんな愚かしい理由で己の身を危険に晒したわけじゃあ、無いだろう？」

そんな行動とは勿論、俺がリーブルを庇ったことだろう。

俺は慌てて口を開いた。

「はい、勿論違います。仮にもリーブルは任務中では俺の仲間だし

た。そんな奴に怪我をさせて帰れば俺の信頼に係わります」

そういえば、学園長は満足したようににっこりと笑った。
なんだかこの人の一挙一動は心臓に悪い。

「ああ、良かった！ やっぱり君は良い子だ！ 自分の立場というものを良くわかっていて！ 自分が同情だなんて愚かしいことが出来ないということをわかっていて！ だから私は君がお気に入りなんだ！！」

学園長は今まで座っていた椅子から立ち上がり、また言った。
俺を注目させるためだろうか、ぴんと人差し指を立てて見せた。
もし目的がそうならばそれは成功している。

「話を戻そうか。その全ての原因はあの子の過信からくるものだね」

「はい、」

「仕方ない。せっかく兵器として利用してやろうと思ったのに、これじゃあ本当にただのポンコツだ。あれはもう要らない」

“あれ”。学園長があんなにも冷めた目でリーブルを、子供をあれと呼んだ。

それはもう、あいつを彼の愛すべき子供として、人間として見ていないということだろう。

「消して、しまおうか」

その声に反応して顔を上げた俺を見て、不安に思っていると勘違いしたのか、学園長は優しく笑って俺に言った。

「なに、あれを嫌って憎んでいる子は山ほどいるさ。私たちが何かをしなくてもそれとなく^{けしか}喉けてやればすぐにでもあれの首は刎ねられるだろう。君は何も心配しないで、」

「いえ、違います」

はつきりと否定の意を示すと、学園長は器用に片方の眉を上げ、怪訝そうな顔をした。俺は学園長の目を真っ直ぐに見て言った。

「あいつの始末は俺に任せて下さい。止めは、俺が刺します」

余裕という名の油断

（……まあ、仕方ないかな）（君は“同じもの”だからねえ）

慎重という名の強さ（後書き）

主人公マジ厨二病。

なっがいし、ぐっだぐだだし。

またいつか修正をしたいと思います。

学園長は書いていて楽しいけど、なんだか面倒です。

主人公くんがそのことに勘付いているかどうかは別として、とりあえず学園長方は最初からリールくんを助ける気（救う気？）ゼロです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5293z/>

最強主人公もどきが消えるまで

2012年1月8日22時45分発行